

2012 年度 前期

授業改善アンケート調査結果

大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科

授業改善アンケート調査結果

1. 授業改善アンケートの概要

人間科学研究科では、平成 16 年度より、毎学期末に授業に関して受講生に尋ねるアンケート調査を実施している。平成 22 年度後期より実施方式を大幅に改訂し、全科目を対象に授業内でアンケート用紙を配布・回収する方式から、講義科目のみを対象に、学務情報システム KOAN を利用して Web 上で回答する方式に変更した。質問項目も刷新し、また英文を併記して留学生も回答しやすいようにした。実施期間は以下の通りである。

2012 年度前期アンケート回答期間：平成 24 年 7 月 24 日～8 月 6 日

2012 年度前期アンケート回答期間（集中講義 A）：平成 24 年 8 月 10 日～8 月 12 日

（集中講義 B・C）：平成 24 年 9 月 21 日～10 月 5 日

対象科目数・回答数と科目群ごとの内訳は、以下の通りである。受講登録者数に対する回収率は 32.5% である（なお、受講登録者数は受講者数の実態が反映されたものではない）。

平成 24 年度前期授業改善アンケート対象科目数・回答数

学部			大学院		
	対象 科目数	回答数		対象 科目数	回答数
基礎科目	8	423	共通科目	6	31
共通科目	6	36	先端人間科学科目	2	11
行動系科目	13	113	行動学系科目	9	19
社会系科目	13	128	社会学系科目	7	26
教育系科目	9	110	人間学系科目	6	11
グローバル系科目	12	100	教育学系科目	12	54
			グローバル人間学系科目	14	48
学部計	61	910	大学院計	56	200
計(大学院+学部)				117	1110

回収率：32.5%

回収結果は数値化して集計し、自由記述分も含めて教員にフィードバックされ、個別の授業の改善に役立てられている。さらに、平成 22 年度後期より、アンケート結果がより授業に反映されるよう、担当講師からアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの提出を求めている。

2. 授業改善アンケートの結果

ここでは、平成 24 年度前期の授業改善アンケートの結果を示す。ただし、自由回答項目は除いてある。

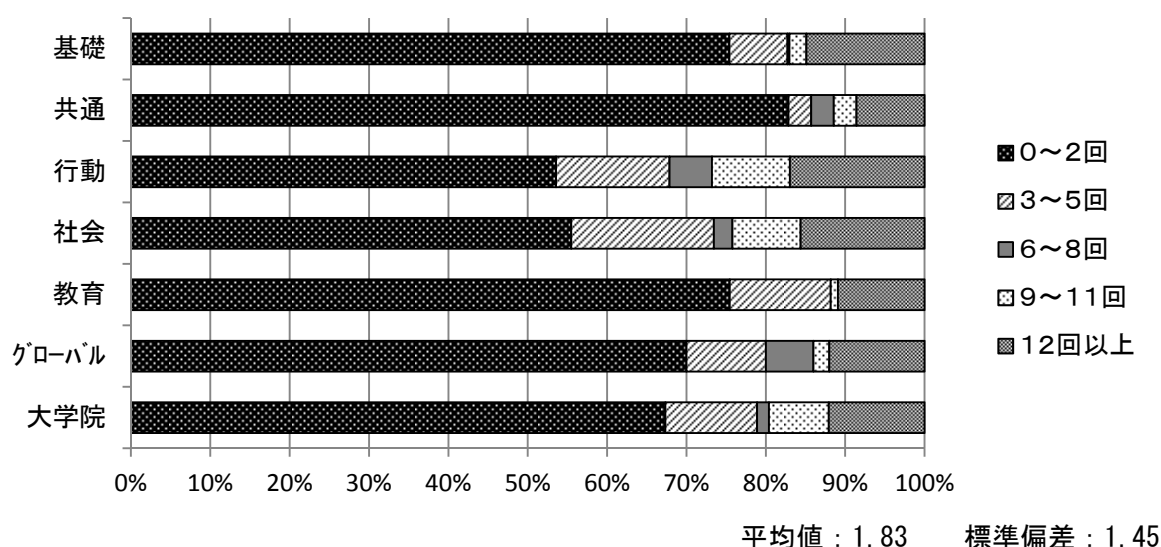
集計は、学部科目については各科目が属するカテゴリーごとに集計を行った。「基礎」は豊中キャンパスで開講される「人間科学概論」等の基礎科目、「共通」は人間科学部での共通科目である。大学院科目については、回答数が少ない学系があるため一括して集計を行った。なお、各学系によって 1 科目あたりの受講者数などの状況が異なるため、科目群間でアンケート結果を単純に比較できない点に留意する必要がある。また、途中で受講を断念した科目については回答しなくてよいとアンケート画面に明記したにもかかわらず、対象の授業を 12 回以上欠席している回答者が全体の 13.8% いる。設問では欠席回数を尋ねているが、出席回数を回答すると勘違いしている学生がいたかもしれないので、2012 年度後期より出席回数を尋ねる形で設問文の変更を予定している。

平成 24 年度前期では、授業全体に対する評価を 5 段階で尋ねる設問 13「この授業は全体として良い授業だったと思いますか？」の回答の平均値が 3.79 であった（数値が高いほど高評価）。前年度後期の平均値 3.94 より若干下落している。今回とおおむね同じ科目を対象とした平成 23 年度前期の平均値は 3.81 で、ほぼ同じ数値が出ている。前期よりも後期の方が若干評価が高くなる傾向があるようである。

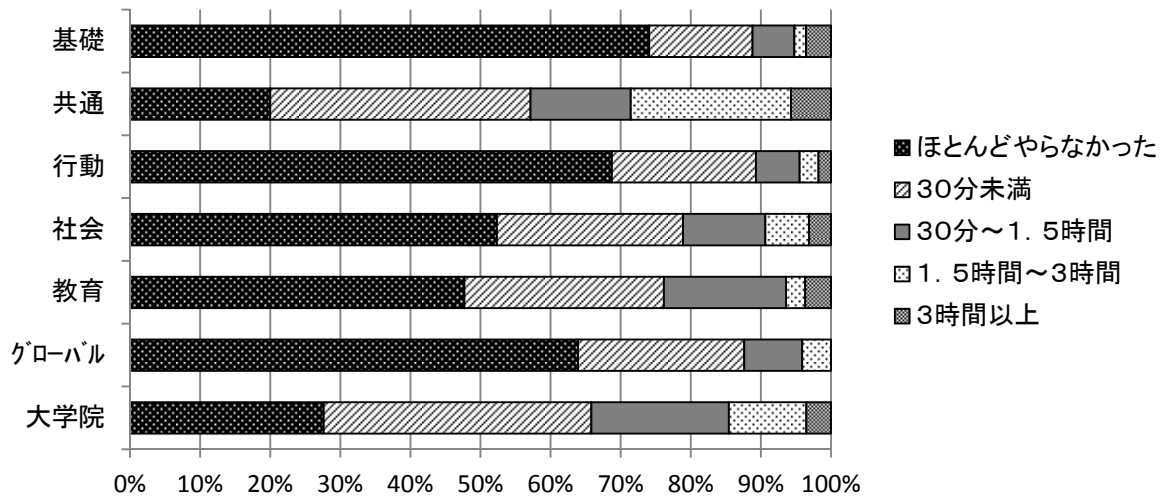
今回のアンケート結果では、設問 2「この授業の予習・復習にあてた 1 週あたりの平均時間はどれぐらいですか？」における「ほとんどやらなかった」という回答の割合が 57.4% で、前年度前期の 62.18%、前年度後期の 62.9% から減少した。理由は色々あるだろうが、人間科学部では前年度より学生の予習・復習を促進するような「自主的学習を促すシラバス作成指針」に沿ってシラバスを作成するようにしたので、その効果が表れてきている可能性も考えられる。

各設問の結果の詳細は以下の通りである。

1：この授業を何回欠席しましたか？

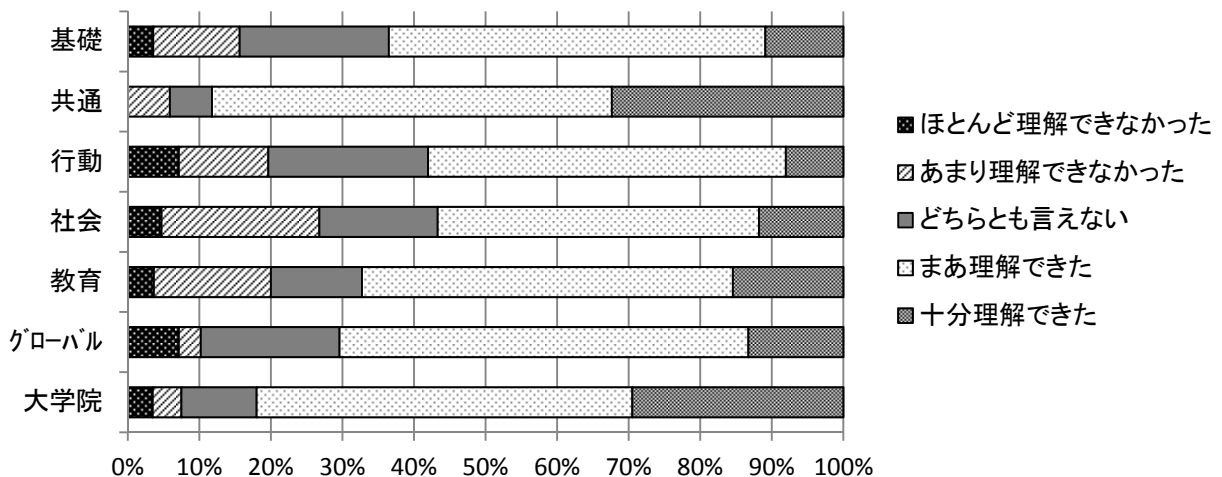


2：この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれぐらいですか？



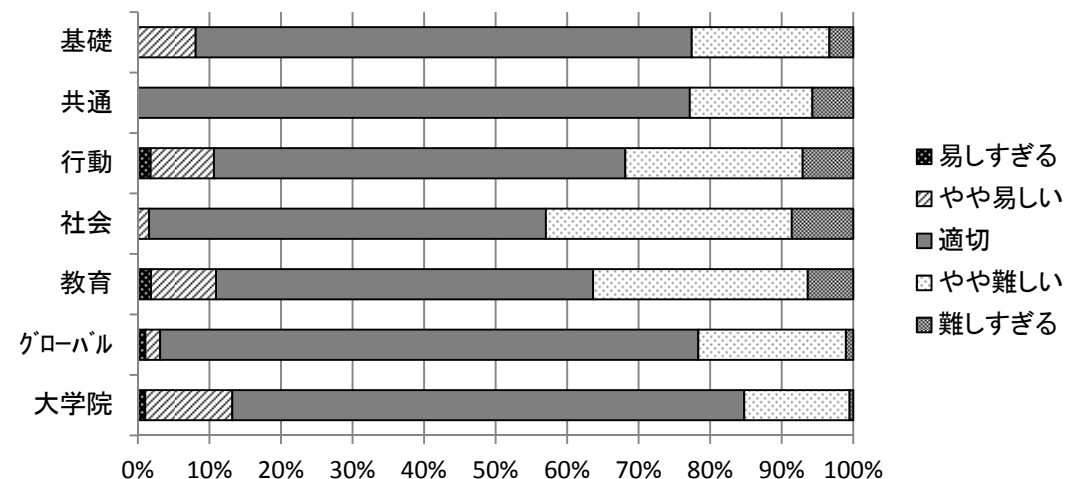
平均値：1.73 標準偏差：1.04

3：授業内容は理解できましたか？



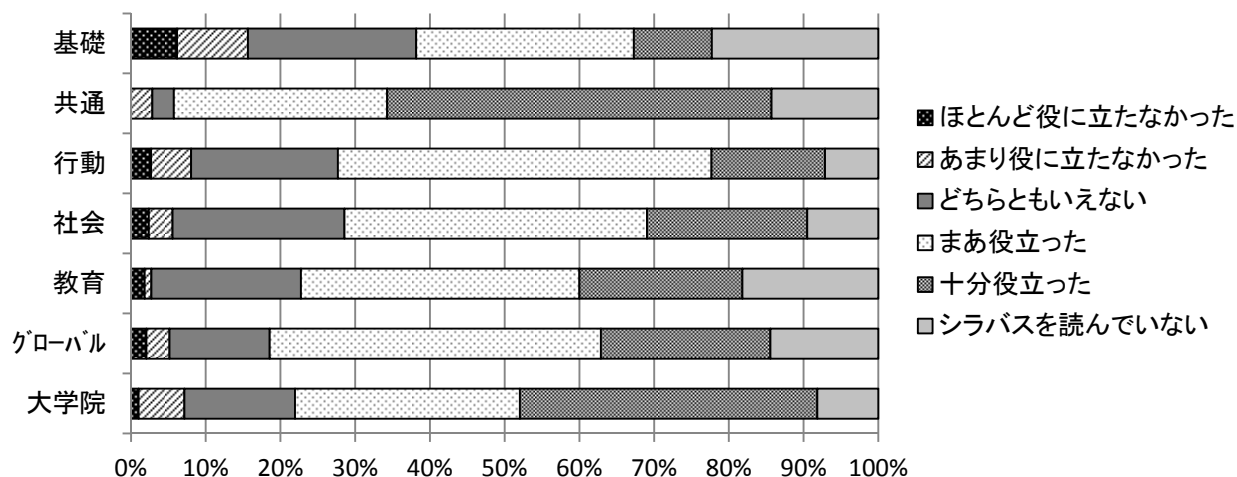
平均値：3.63 標準偏差：1.01

4：授業内容の難易度はどうでしたか？



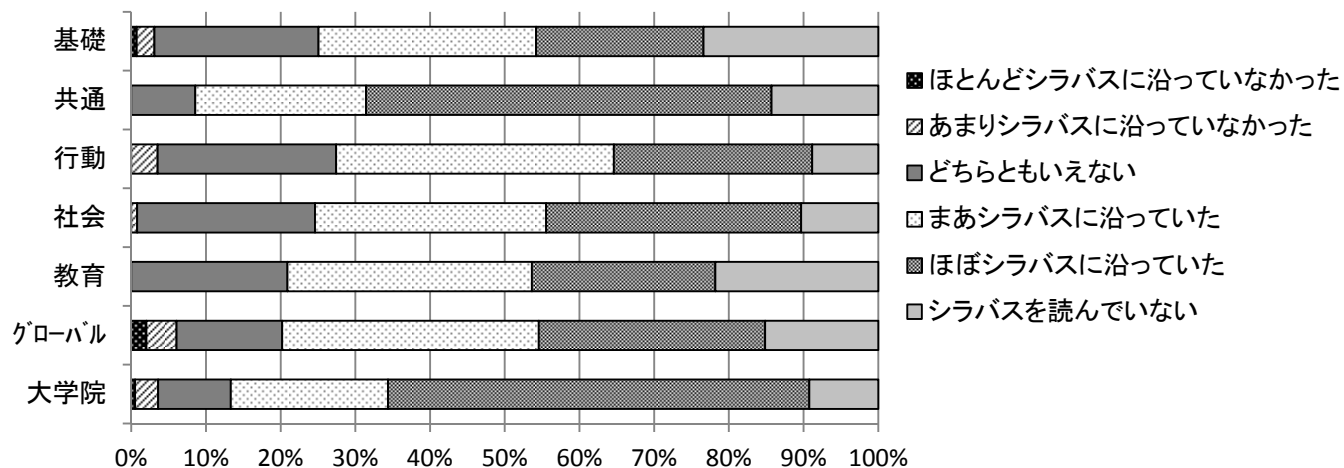
平均値：3.21 標準偏差：0.66

5：シラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？



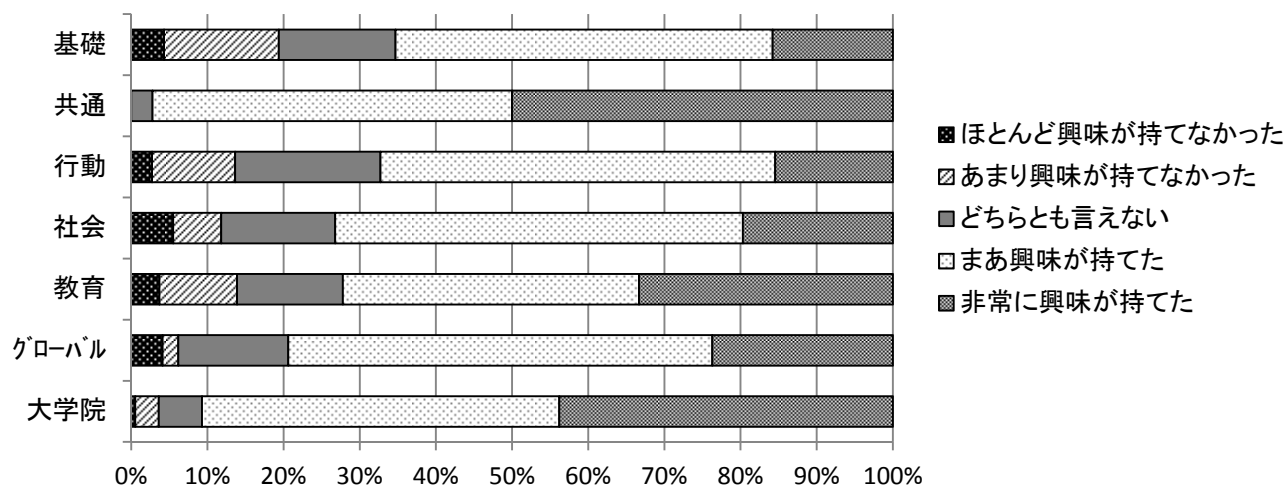
平均値：3.18 標準偏差：1.66

6：授業はシラバスに沿って展開されましたか？



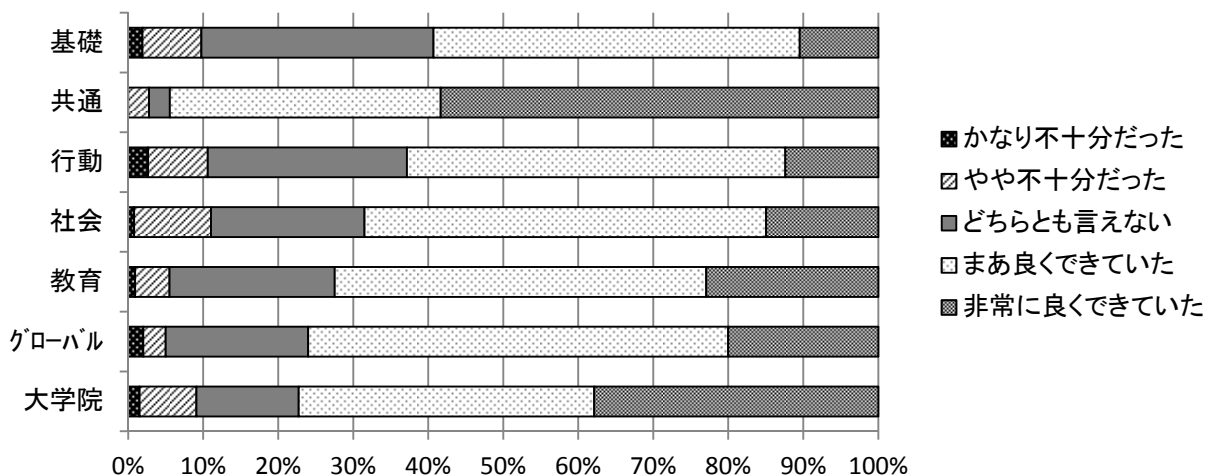
平均値：3.40 標準偏差：1.72

7：授業はあなたにそのトピックに対する関心を引き起こすものでしたか？



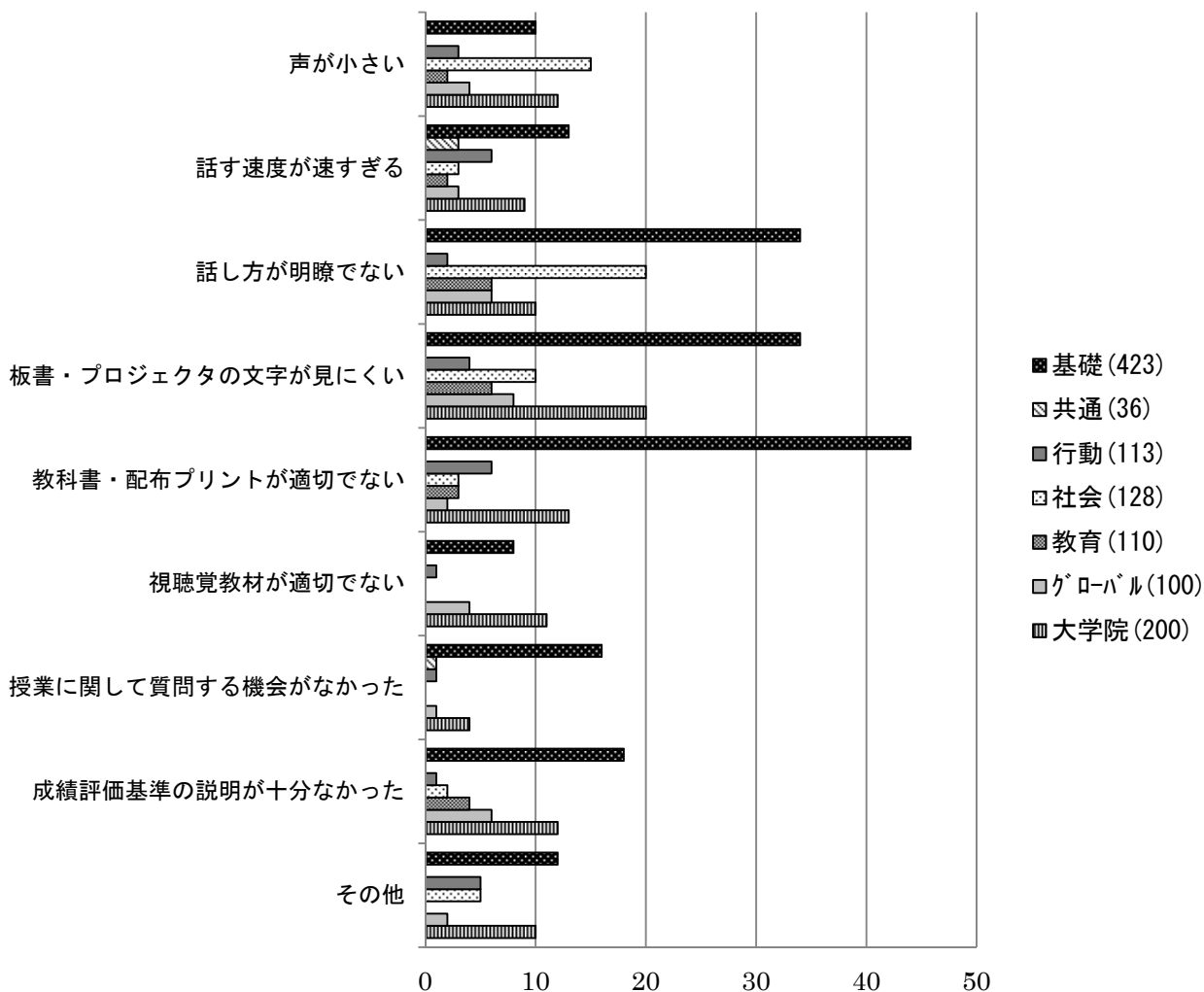
平均値：3.83 標準偏差：1.01

8：授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていきましたか？



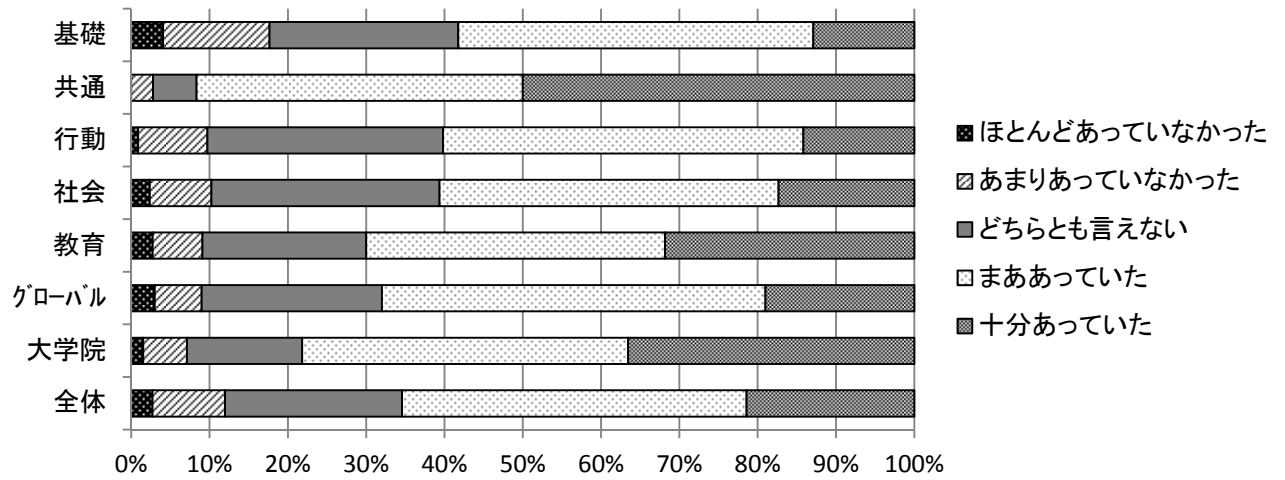
平均値：3.77 標準偏差：0.90

9：授業の進め方について、以下の点で気になったことがあれば、該当する項目にチェックを入れてください。[複数回答可] ※数値は回答数。()内の数値は各カテゴリーの回答数。



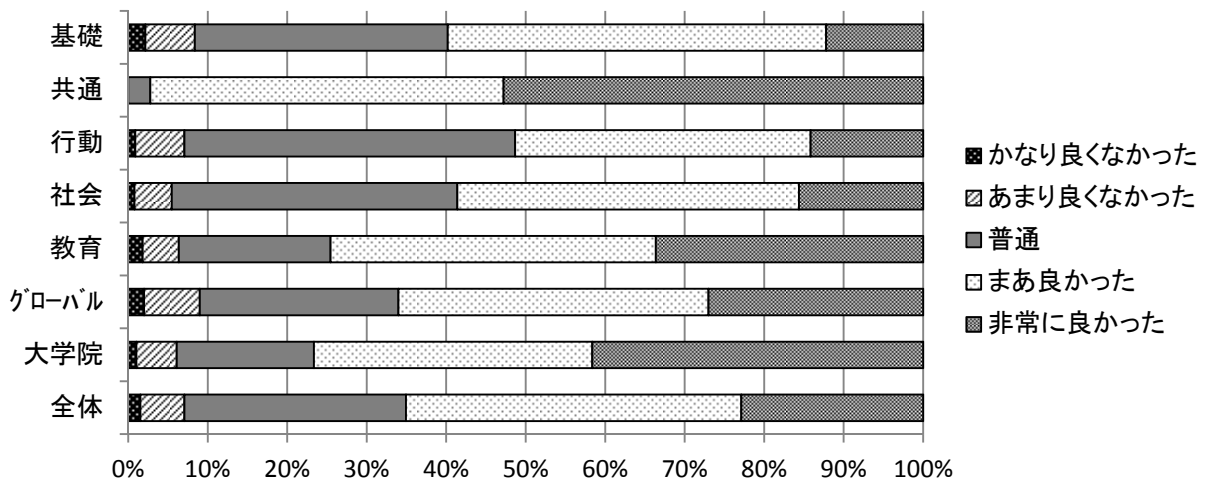
全体の回答数=1110

12：この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか？



平均値：3.72 標準偏差：0.99

13：この授業は全体として良い授業だと思いますか？



平均値：3.79 標準偏差：0.91

問 13 より学部講義科目に関する満足度の結果を示す（回答者が 10 名以上の科目のみ）。
 大学院開講科目については回答数が少ないため全て対象から除外した。回答数とは質問 13 に回答した人数を示し、平均値が高いほど受講生の満足度が高いことを意味している。

2012 年度前期に開講された学部のアンケート対象科目 61 科目のうち、回答数が 10 以上の科目は 31 科目で、そのうち平均値が 4 以上の科目は以下の 11 科目であった。

2012 年度前期 学部講義科目 満足度の平均値が 4 以上の科目

	回答数	問 13 平均値
同和教育論	14	4.57
キャリアデザイン概論	17	4.53
紛争復興開発論 I	10	4.50
臨床心理学 II	18	4.33
比較福祉論 II	12	4.25
国際協力学 I	10	4.20
比較行動学	12	4.08
教育人間学 II	18	4.06
学校社会学	23	4.04
臨床教育学概論	40	4.00
ボランティアの集団力学	16	4.00

3. 担当教員からのコメント

以下は、授業改善アンケート対象科目（ただし、基礎科目は除く）について、担当教員がアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの一覧である（教員名の五十音順に掲載）。

足立 浩平
心理統計法
統計学のような数理系の学問は難解な感がありますが、わからない事があっても、むしろ気にしないことが大切です。実際に、統計解析法を使う場面になってから、解析を行った後に、自分が理解していることに気づくことが多いことと思います。

池田 光穂
応用人類学特講
アンケートの回答はありませんでした。受講者は院生2名です。2人とも優秀な成績で合格しております。授業の内容は下記をごらんください。 http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/120320AAnthro.html

石井 正子
紛争復興開発論Ⅰ・紛争復興開発特講Ⅰ
授業は、一部参加型を取り入れ、学生どうしがディスカッションをする機会をもうけるなど、受動的な講義にならないようにつとめた。そのことが工夫しているととらえられていることを、うれしく思う。来年度からは、ディスカッションを実施しやすいように、さらに工夫をしていきたい。また、成績評価の基準に関する説明は、第1回の授業で行ったつもりであったが、不足しているとの回答をいただいた。来年度は、この反省をいかしたい。

大谷 順子
地域秩序論Ⅱ
ゲストスピーカーも3人お呼びしましたが、アメリカの大学の研究者が同じ課題をどのように見ているのか聞いて面白かったとか、JICA職員など実践の場からの話を聞いて、就職活動の参考になったというコメントがあり、頑張って日程や予算の調整をして、ゲストスピーカーに来ていただいた甲斐がありました。PPTの字をもっと大きくしてくださいというコメントがありました。字が読めない方は特に、前のほうに座ってください。今年は、人間科学部の学生だけでなく、法学部や外国語学部の学生も受講しに来ており、教室はいっぱいでしたが、前に座っている人は熱心な院生が多く、後ろに座っている人たちは学部生が多くて内職をしていたりしたようです。本講義は、学部と大学院の同時開講ですが、去年は、大学院と学部の評価に差をつけないでほしい、とコメントがありましたが、今年は、差をつけてほしいとコメントがありました。学生によって希望や期待が違うので、全員の要望に応えることは難しいですがまた工夫を考えてみます。

地域秩序論特講Ⅱ

ゲストスピーカーも3人お呼びしましたが、アメリカの大学の研究者が同じ課題をどのように見ているのか聞いて面白かったとか、JICA職員など実践の場からの話を聞いて、就職活動の参考になったというコメントがあり、頑張って日程や予算の調整をして、ゲストスピーカーに来ていただいた甲斐がありました。PPTの字が読めないで、もっと大きくしてくださいというコメントがありました。字が読めない方は特に、前のほうに座ってください。今年は、人間科学部の学生だけでなく、法学部や外国語学部の学生も受講しに来ており、教室はいっぱいでしたが、前に座っている人は熱心な院生が多かったようです。本講義は、本来大学院生向けのものが、学部と大学院の同時開講となったものですが、人数的には学部生の数が圧倒的に多く、その雰囲気にはひびかれてしまいがちです。両方のレベルに合わせることは難しいのですが、熱心な院生の方々も満足できるように、工夫を考えていきたいと思います。

岡田 千あき

国際社会開発論Ⅰ・国際社会開発特講Ⅰ

今期は専攻以外の学生を含め、多くの学生が受講してくれました。ありがとうございました。講義の最後に授業の感想を聞きましたが、「難しかった」という回答から「簡単だった」という回答まで幅があり、試験の結果を見ても、受講生の理解度に差が見られました。内容の工夫をしたり、出席を取るなど更に理解度を上げてもらえるように授業の内容を再考したいと思います。ゲストスピーカーの講演や体験談を話した回が好評でしたので、これらについては今後の授業でも取り入れていこうと思います。

荻阪 満里子

認知脳科学論

人間科学研究科、医学研究科の複数の先生による講義で、内容は現代の最先端研究が盛り込まれていました。そのため、基礎知識が無いと難しいところもあったと思います。ただ、このような研究が進んでいるのだと、知っていただくことはできたかと思います。参考文献を紹介いただいているので、それで補ってください。来年度は、各先生の講義が、もう少し時間的に余裕があるように、計画したいと思います。

小野田 正利

学校経営学特論

院生の授業評価を見たが、ほぼ高い評価を得られたと思うし、それなりに体系化して、授業の中味を配列していくことができた、自分自身でも感じている。昨年度から大学院生向けのこの講義では、15回全部を「学校と保護者をめぐるトラブル」というテーマで実施したが、一方的な講義形式にならないように、3度のワークショップの回を設けて、参加型としたほか、適宜に映像資料を使って、ある程度完成された形へと近づいているような手応えがある。配布する資料も、研究論文などを活用している。評価についても、計3回のレポートを課しておこなった。次に工夫するとすれば、その回の概要を簡潔にまとめた資料を配付するなどの余地があるかもしれない。

川端 亮
計量社会学・計量社会学特講
授業時間ぎりぎりまで講義している場合がおおく、次回の課題を明瞭に指示する時間がなく、混乱する受講生が多くいたことについて、反省し、次回の講義においては、改善するようにしたいと思います。

木前 利秋
環境と社会・環境と社会特講
本科目は、オムニバス方式を採用して複数の教員によって毎回異なったテーマを取り上げてまいりました。アンケート結果を見るかぎり、大きな問題はなかったかと存じますが、授業改善の余地はまだ十分にあるかと思えます。今後とも出席者の関心に沿った内容をシステムティックに展開できるよう工夫していくつもりです。

木村 涼子
ジェンダー教育学・ジェンダー教育学特講
まず、アンケート回答者の少なさが反省点です。講義の終わりに十分に依頼したつもりでしたが、多くの回答者を得ることができませんでした。現時点で四人の方の回答が寄せられていますが、それらの方々の貴重な意見を参考にしていきたいと思えます。一つには、内容をもう少し高度なものにした方がよかったかと考えます。来年度は大学院生のことをさらに意識した内容をつくりあげていきたいと思えます。また、話し方が不明瞭だと感じられた方がお一人いらしたので、その点を今後気はつけていきたいと思えます。

熊倉 博雄
人間科学概論 I 「行動の科学」
講義冒頭で説明したように、行動学科目のカリキュラムは、第1 Semesterから第3 Semesterまで連続したものと考えています。第2および第3 Semesterは、科目名に「心理」という言葉があるため、生物系の分野は第1 Semesterに収めざるをえません。また、この科目は、行動学科目進学者のみならず、人間科学部全員必修であるため、それにふさわしい内容を提供したいと考えています。行動学から、人間科学部生全員に提供できる内容としては、本当の意味での「科学」研究の実際を知ってもらうことです。さらに、現代の状況を考えると、脳科学についての基本的な理解は、人間科学部生全員に持ってほしいという信念があります。このため、一部の学生諸君には不満が生じるかもしれませんが、真に科学的な態度を持ってもらうことが重要だと考えています。
行動形態学
講義の冒頭で説明したように、現行カリキュラムで生物関係の講義数があまりにも少ないため、内容が過剰になっているという自覚はあります。ノートが取れない、というのは問題なのでなんらかの解決ははかりたいと思えます。

近藤 博之
教育動態学
時間割の都合で受講者の数が予想外に多くなり、少しやりにくい面がありました。29名の回答は毎回の出席者及びレポート提出者の半分以上ですが、全員が答えたとしても恐らくこんなものなのだろうと思います。改善の余地がまだまだあると受け止めました。ところで、レポート採点に合わせて毎回の出席表から各人の出欠状況を転記したところ、入学時の「あいうえお」順の席順がいまだに授業中の居場所に反映されていることが分かりました。自由意思で選択しているつもりでも、実際にはそうでもないことのよい例だと思えます。
教育動態学特講
2人だけの回答なのでコメントは控えます。

佐々木 淳
臨床心理学特講 I
全員からの回答による結果ではなかったが、一定の目標は達成したものと考えられる。授業で扱う内容にいくつか焦点をつけて特に重要な点が伝わるように配慮したい。
臨床心理学研究法特講
全員からのコメントによる回答ではなかったが、来年度はより実用的な授業になるように配慮したい。

佐藤 真一
高齢者行動論
学部3年生以上向けの講義科目である。回答者18名のうち4名はほとんど出席していない学生の回答なので、この4名が否定的な回答をしているとすれば、他のほとんどの学生は肯定的な回答であったと思われる。最終試験は持ち込み可とのことだったのでそうではなかったとのコメントは、当該学生の誤りである。その他、特に改善すべき点についてのコメントはなかったと思料する。
臨床死生学・老年行動学特講 I
大学院生向けの講義科目である。回答者8名のうち2名はほとんど出席していなかった学生であり、この2名が否定医的な回答をしていると仮定すると、他の6名の回答は本科目に対して肯定的に回答していた。後半の授業の方法については、執筆中のテキスト原稿を読みながら、かつ詳細な解説を施しながら行うということを予告していたのであるから、コメントについては当該学生の授業態度に問題があったと思われる。あえてパワーポイントを使用しない講義をすると宣言して行った講義であり、他の学生からは極めて高い評価も受けている。

鈴木 広和
動態地域論 I・動態地域論特講
来年度のシラバスを、より講義内容を反映したものに修正したいと思います。

園山 大祐
教育制度学特講
予習、復習が不十分であったため、指導を徹底したい。

高田 一宏
コミュニティ教育学特講
回答者が4人と少ないためコメントは難しいが、受講生の関心に沿った内容で、難易度も適切だったように思われる。今後は、アンケートへの協力をさらに徹底して呼びかけたい。

津田 守
多文化共生社会論 II・多文化共生社会論特講 II
受講生の半数弱がアンケートに回答くださいました。ありがとうございます。全員が「授業内容を理解できた」とのことでした。ただ、学部生は全員が難易度について「適切」とのことでしたが、大学院生にとっては「易しい」ないしは「易しすぎる」との回答も半数はありました。いずれにせよ、ほとんどが「(非常に)興味を持った」とのことでした。求めていたものにあっていたかどうか、学部生間と院生間で多少濃淡がありました。こういったズレを念頭におきつつ、来年度の運営をさらに工夫してみます。講義最終日に、それまでの口頭発表読み原稿を集めた文集を皆さんに配布できたのですが、一つの目に見える成果として嬉しく誇りに思っています。

堤 修三
社会保障政策論 I・社会保障政策論特講 I
学部生は難しい、院生にはまあまあの程度の難しさだったようだが、レポートの内容をみるとあまり差はなかった。社会に出たら必要な、ものの見方や考え方を学んでもらえれば良いと思って講義をしたが、それがどの程度伝わったか。詳しいレジュメを配っているのでも、予習も復習も期待していないが、授業中、昼寝をしている学生もかなりいた。せめて授業だけは真剣に訊いてほしいものだ。75名ほどの受講者からの質問・感想にすべて文書で回答したが、エネルギーを使う割には、真剣に質問していた学生は3割程度か。国際公共政策の学生が4名ほど受講していたが、皆、真面目だった。

常田 夕美子
民族誌学
人間科学研究科の多様な分野の学生が受講したのはよかった。しかし、登録のみで出席しない学生が多数おり、混乱を招いた。

中村 安秀
国際協力学 I・国際協力学特講 I (医療通訳入門)
全体として、出席率も高く、ワークショップに対する評価も高かった。ただ、受講者総数に比較して、アンケート回答者が少なかったのが残念である。国際協力学 I では10名の回答者のうち1

名、国際協力学特講 I では 12 名の回答者のうち 4 名が、12 回以上欠席であった（これは、出席回数と間違っ、書いたものだろうか？ できれば、出席回数を尋ねる質問形式にしたほうがいいのかもしい）。「声が小さい The instructor's voice was too soft.」という回答が 2 名あった。ただ、質問内容の日本語と英語が対応していない気がする。

国際健康開発論特講

2 名の回答者であった。「少人数でアットホーム的な雰囲気」、「授業の一環として学外での講演にも参加」といった部分を、評価していただいたのはうれしい。今後も、従来の教室講義型の講義ではなく、よりフレキシブルな講義形態をめざしていきたいと思う。

中山 康雄

人間科学基礎理論・人間科学基礎理論特講

アンケート内容については、今後の参考にしたい。授業に関心を持って参加した学生とそうでない学生の間では、理解度の違いがでたと思う。また、アンケートとは別に、筆記試験の方で、真剣で考えさせられる回答が今年度もかなりあったので、こちらの方も参考にしたい。

日野林 俊彦

比較発達心理学

性に関わる講義であり、学生の関心がどのあたりにあるのかを踏まえた講義になればよかったのかと反省しています。また性に関するテーマは、現時点では、個別の学問と重なっているため体系的な話を展開するのは困難な領域と思います。今後は、そのあたりの共通理解から講義も展開できればと考えました。

福岡 まどか

地域知識論 I ・地域知識論特講 I

第 1 セメスターの授業は映像を用いることが多く、特に第 1 セメスターの後半は 比較的まとまった長さの映像作品を見て、質問やコメントの提出を求める形式の授業がありました。映像作品はどれも大変貴重なものを用いており、重要な情報も多く提供していたと思いますが、「映像が長すぎる」、「英語の映像を長時間見るのが疲れる」、などのコメントもありましたので、今後は映像の時間や、前後の解説やディスカッションの時間配分などを調整することにもう少し努めていきたいと思っています。

国際教養 I アジアの文化と社会を知る（全学共通教育科目）

この授業では東南アジアの上演芸術について様々な角度から考察しました。できるだけイメージが湧きやすいように映像、音響資料の他にも仮面や人形などの実物も使いながら、授業を行いました。また基本文献の紹介も行いました。コメントの中には「インドの叙事詩についての知識が深まった」、「授業の後に参考文献を読んでみたくなった」などの回答が見られました。この授業を履修して、そこから文献調査なども行い、東南アジアの芸術に広い関心を抱く人が増えることを期待しております。

藤岡 淳子
人格心理学特講
15 コマの講義で、ロールシャッハの施行法からスコアリング、構造一覧表の作成と解釈の基礎までを学ぶのは、大変なことであるが、ほとんどの学生たちは、よく予習・復習をして学んだと考えている。コメントについては、今後の参考にしたい。

藤川 信夫
教育人間学Ⅱ・教育人間学特講Ⅰ
授業の理解度は、おそらく該当箇所を事前に予習しているかどうか依存しているように思う。いずれにしても、全般的には、当初想定していた通りの結果が出ているように思う。今後も、授業方法の改善に積極的に取り組んでいきたい。

丸田 健
キャリアデザイン概論・キャリアデザイン特講
この授業は、今回が初めての試みでした。人間科学部の卒業生で、民間で新卒採用に関わる仕事に就いている皆さんの先輩を講師に招き、土曜日四日間集中の形での授業になりました。週末の授業であるにも拘わらず、多数の受講者があったことを喜んでます。また授業後のアンケート結果を見ても、良い授業であったと満足の声がほとんどでした。受講者の皆さんは、民間企業志望者以外にも、公務員志望の方あるいはいったん大学院への進学を考えておられる方もいたはずで。授業では、そのような多様な進路を想定しつつ、キャリアについて考える機会を提供してもらったものでした。ゲストで登場いただいた他の3名の卒業生の体験談も参考に、それぞれのキャリアを開拓していただきたいと思います。

宮原 暁
超域地域論Ⅰ・超域地域論特講Ⅰ
地域とは、人々が生存のために必要な空間とのかかわり合いのなかで生ずる政治的、文化的な場ととらえることができる。それは、国民国家のように持続的に人々の認識を規定するものもあるが、国民国家のなかにも伸び縮みする「空間とのかかわり合い」が複数併存する。また、一つの地域は、別の人々にとっての地域と衝突することもある。地域研究は、こうした地域を双方向的、重層的に把握することで人間の理解につなげようとする学問分野である。こうした他者のまなざしを意識せざるを得ない学問分野では、研究・探求の手順をラディカルに客観化すれば真理が見つけれられるというわけではない。超域地域論では、この前提に立ち、人と環境との関わり方としての文化が、異なる「地域」が接触する局面においてどう変化するか考えた。社会変化に関する理論は、地域のダイナミックなあり方をいくつかの局面に分けて分析したのちに、それを統合するという作業を通してであろう。地域研究講座は、こうした局面に即して構想されている。超域地域論を受講した皆さんは、地域研究講座の他のレイヤーを知ることで、本講義の意味をより深く理解することができよう。

三好 恵真子
人間環境論Ⅱ
全体として、出席率が高く、授業への関心度や理解度が高く、大変嬉しく思いました。様々な分野の受講生がいるために、参加型の機会を多くしたことも反映されていると思います。自然科学の内容を扱うため、出来るだけ分かりやすいテキストやパワーポイント等の映像資料を準備しているつもりですが、プロジェクターの機種等の関係で、色の写りが悪かったところがあったとご指摘を頂きました。その点、次回への課題にしておきます。
人間環境論特講Ⅱ
全体として、出席率が高く、授業への関心度や理解度が高く、大変嬉しく思いました。大学院向けの授業のため、何らかしら研究に役立つ内容になるよう、柔軟に対応し、議論や参加型の機会も多くしました。自然科学の内容を扱うため、出来るだけ分かりやすいテキストやパワーポイント等の映像資料を準備しているつもりですが、プロジェクターの機種等の関係で、色の写りが悪かったところがあったようです。その点、次回への課題にしておきます。
人間開発学特講
人間開発学講座の教員によるオムニバス形式の授業でしたが、受講者の理解や関心の度合いに、やや差が出たように思います。ご意見に鑑み、授業のタイムスケジュールを少し工夫して、参加型の形式を極力取り入れたり、総合討論の機会を作るなどが必要性を感じ、今後も課題にしたいと思います。

牟田 和恵
人間科学概論Ⅱ
内容はおおむね学生の興味関心に沿っていることがわかった。試験時間が短かったという記述が2名あったので、今後の参考にしたい。

村上 靖彦
行為と倫理・行為と倫理特講
いただいたコメントに対するフィードバックが十分でなかった点を反省しております。これからは十分に時間をかけようと思います。板書も注意します。どうもありがとうございました。

Saori YASUMOTO
Quantitative Research Methods
I appreciate students for taking time to evaluate the course. I wish I could receive more comment from students (especially written comment), but it was nice to be able to confirm what worked and/or not worked in classroom. I will take students' comment seriously to further develop the course.
Academic Writing II
I appreciate students for taking time to evaluate the course. This course was a little challenging for me to teach for many reasons; however, the hard work of students made the

course meaningful and enjoyable. I will keep working hard to improve the course based on students' comment.

山田 一憲

比較行動学・比較行動学特講 I

この講義では、「進化の機構」と「Tinbergenの4つの問い」を理解してもらうことを目的として設定していました。期末試験の結果やアンケートの回答を見る限り、これらの目的はほぼ達成できたように思います。アンケートのコメントには「板書が多い。時間の無駄。」という意見がありました。板書するかどうかは、各自の判断に任せており、強制ではありません（どちらかというところ、しっかりとした板書があった方が助かるというコメントをもらうことが多いです）。私の講義は、論文の図表をスライドで示して、そのデータの読み取り方を説明し、内容を黒板に文書でまとめる、という手順を進みます。この手順を採用するのは、データを読みとって文章化することが、科学論文を作成する上で大切な技術だからです。アンケートの回答数やコメント数が少なかったのは残念でした。

山中 浩司

文化社会学

今回のアンケート結果では、内容がやや難しいという回答が結構ありました。授業方法を工夫することで内容の水準を下げずに理解してもらえるように配慮します。受講生が多いためにポートフォリオシートによるフィードバックも限界があり、授業中にもう少しコミュニケーションをとる時間を多くするように改善しようと思います。

文化社会学特講

回答数が少ないので判断は難しいですが、内容的にはやや易しいという評価であったので、学部生と大学院生の折り合いをつける工夫を考えたいと思います。

Robert Scott North

比較社会学

アンケートの回答率が低いですが学生の評価は悪くない。が、もっと生き生きとした授業がしたい。週一回、90分は物足りない。学生が受講するコマ数は多すぎだし、授業中に参加しないで、座るだけでいい。正直、このような授業は、大学での専門教育にならないと思う。来年度から比較社会学がG-30の授業にもなるそうです。そのために授業の内容を再編してレベルアップに試みたい。